武家圖象備畫之 四月次

正統試連城鞆

義賢の馬藝

苗木弁尾執交情於鎧場

平氏政秀諫信長

佐々山口先登于高遠城

名越山三傳名お男色

有永井隱德陽報

上杉竹菴義戰于伏見城
妙林尼智勇超丈夫
稚宴幼弱吾臥龍氣
松田右馬達忠孝

本朝武家圖象傳卷之四

正繼試連城銃

井上外記源正繼ハ播州英賀城主井上九郎右衛尉ゴなり豊臣秀吉公播州退治ニ付九郎右衛門三木城ノ先登ニ進むゴ戰死ス付テ正繼幼稚なり成人ニ及酒井阿波守ハ世ニ從ヒ浪速戰場ニ於テ敵首二級獲り天下混一ニ及ヒ台德大君ニ仕ヘ奉ル邑千石領ス子孫ハ正繼幼年ヨリ火砲ニ術ヲ好ミ稽古ヨリ正保

三年九月十二日長
坂丹波守稲葉喜
太夫と會して弥家
藝花仮の長篇よ
りもく忽女人と斬
て死ぬむ剛勇の
名後世よ称すう子
孫相続く幕府よ
り仕ル
羅山先生連城銃
之説曰
寛永十二年乙亥

正継初造此銃既
而降　鈞命遣官
使与正継共載此
銃赴野郊以監之
試之其郊不差誠
是奇外之奇也講
武之大器何以如
之哉　文句前後畧
夫色彩之近世乃

名器あり弓矢の術精熟せり能く術を使ふ
人おのゝ億万の敵なり武器の発機まこと鬼神
を討るゝ巨し治国の守備弘世の長兵なり
むかしむかし

義賢通弓馬藝

作者未詳京大夫義賢代に沼新宮の城主
なりの義は天下に有名なる人なりを
ほこり古国の雲守重政と云者あり父上野の重賢
日置弾正は浪人の術の蘊奥を極る者なり政年

乃義成継ぎ義賢心弦執の勇ましきを傳聞
はん事成難へども政不許さ左は潔あり竟政
当代相傳の秘地を
弟に新前に譲る合
よ道隠を変よ居
住まるゝ六年義
賢相を術を
ひくやまを政を志
感ず沼州よ移る
時よ義賢去帰
七ケ所の采邑と加
為せしむ之を伝

試授くるを居たりしかども兼て深切なるを以て戦夫の
亀鏡とまもれし又駅伯いみ後妻の警を始て
を傲めを悟れり当世を鄙を表に表れ
賢を以て鋭花とし

苗村井尾喜交情於鎗場

苗村石見を藤堂を虎の勇士井尾喜交長
の我が盛貌の軍隊試借し浪人なり元和元年五月
七日河州八尾の會戦に双士姓名を唱へ鎗を交む
して苗村過く蓮池より弦巻の鎗を提の上に

弛上り時に井尾木を屈に来て鎗を苗村と刺
苗村受流して下を完乎として云るは
ぬるに井尾喜交は世に強なる兵士副也も
身を常に於て戦場を襲る者
我朋友の平田九郎右衛門と共に交情の間なるは
為に之を関作へ時に勇士の戦場に鎗を合る
に弦巻の人と為員を入れ信あるを足下に年
を城中に入て父母妻子と長別の義をしと国
浪人の志を勇ら補をるし死を絶をるなくむば

多くび命令なりく泰平の後世方へ帰り添ひて
我当家の強仕成荷揚さべしとゝいへば井尾左馬
じ鎗成鉢よりて一礼しを互に別れんとせし家よ井
尾左馬此よ出る武者八神と誌しる揚和よ首成
添くゝ名ゝる八公定我朋友の八神主張と討ゝるゝと
ゝるゝ交友の寄ゝ成ゝさだとゝり首あをし
ゝさんと一鞭と当く乗ゝ成ゝ引組ぎゝ成ゝ押へ首
ゝ名主張が首揚和ゝとゝあゝへゝ大の事ゝ分く
苗村殿ゝゝび命もあゝゝび厚ゝ成ゝ謝ゝ成ゝとゝて

引退く苗村ゝゝて
ゝづゝく結まへゝゝ成ゝ
ゝ名ゝ我アが勇士揚山
揚ゝ成ゝ丈ゝゝ成ゝ歩卒
ゝ成ゝゝあゝゝゝれゝ
ゝゝ成ゝゝゝ組
ゝ成ゝ首ゝ成ゝ揚
揚成ゝ揚ゝいゝ
井尾ゝ成ゝ呼ゝ成ゝ
揚ゝ成ゝ遠ゝ成ゝ
扇ゝあげゝ一礼ゝ互
ゝ場成ゝ退ゝ成ゝ
勇気揚ゝ成ゝ士

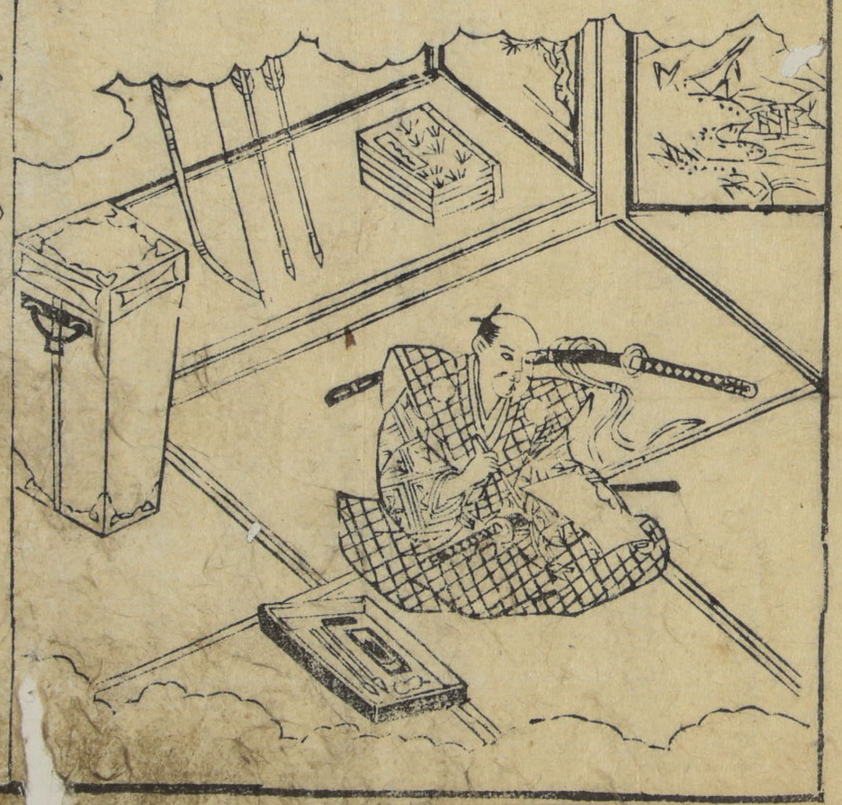
乃至死を迫りて功成さず絶倫乃挙動し

平手政秀諫信長

平手中務大輔政秀は尾州乃豪族にして忠所義膽絶倫乃量あり武田信秀林佐渡守平の中書を以信長を諫めて曰暴悪乃行状のごとき此よりおのく林佐渡守忽腹切して其の行状を諫めて曰信長聞て曰書を信長に奉て自刎して死す信長

大に歎惜し一寺を創建して政秀と号し寺と号して政秀の冥福を祈修せり

二子あり嫡子を宗八と曰乃役を武政し二男を宗八と曰乃役を信長の接侍として大神君乃先駆として討死せり



佐々山口先登二子高遠城

作左衛門義久の成敗ぶ城山口小輝ハ城州伏見の
いやしき者の子なり俱ゑ織田右府様信長の扈従
兩人容顔美麗みめ梅花のごとく柳の腰ハ
乃情ふくみ柳と称ゝむ姿ハ富貴とたとえ
ゝ世ゑ聞ゑ玉美生質右勇武信ゝゝ林乃雷
光那侍臣ゑ慈孝ゑ義ハ多世ゝゝの音曲ゑ堪能なり
小輝ハ小歌乃上手ゑ作りて糸竹の一枝
二枝乃かつらぶしゝ文ゑ河例ゑ天正十年しま
信長ゝ武田勝頼ゑ伐ゝ時女人名十六家ゑ
安ゑ信州ゝ主城ハ勝頼乃臣舎弟仁科ゝ弟信盛ゝ城
守ゝ申ひゝ城信長ゝ攻ゝ旗本の軍ゝ攻ゝ甲州乃
那波死城要ゝ防戦ゝ攻ゝ死亡の者千
ゝ城ゝ奪て武田方乃一番ゑ城門
ゑ乗入ゝ赤母衣ゑ金乃扇作のごゝ乃冠ゝ
ゝ屋形ゑ倒ゝ陣ゑ二番ゑ続ゝ信長山口
小輝女人ゑ城ゝ組ゝ武田方ゑ完ゝ
城門ゑ越ゝ女人ゑ城乃一騎ゝ名ゝ
時ゑ敵城ゑ下合ゝ女人ゑ射ゝ

二人の容貌絶色なりとうんぐくを驚き
びたづく花燭をの
用ゆ戸田主馬の花燭
次に高家素家吉義吉勢
左厚多づきまるを驚
又入るとゞと泣く時は
作る山口名首とを出て涙
門張あらりを故信出
夫人の乗手に出家は
なくに感狀を授ける
先小矢とを出て変るを
ゆくの働希代の武
なり紙月矩を送へ

ざる不奇特の至一人
備悦なりとて多づく
出久くら獨物は感狀と
涙ら下次は作し信義
以石高の働骨折
なり但汝へ武功ら
若ら問義人が勝なれ
ばしとの作まて出光の
所獨物は感狀と涙
ら下るを故日数僅
六十余日と強く信ら
明光秀ガ乃は二條城は闘きあ時は夫人羽柴の陣例
と離れば已ずく信ら仕害の後清兵衛は向く日我く

今まぶ肌みく討死せんハ屍のゝ上の恥辱なるべいざ武具
しく戦死せんとあ人鎧を揃へ代ておゝき数を人元よ
討て死戦城内へ引入て甲冑を剥て敵人乗よ見
城助ゝ俱よ突出て大勢よ渡て合戦よ討死
る月乃額元乃頭を皆紅乃波よ濡て伏て人洞
城高さだと云ものなり

名越山三傳名於男色

名越山三郎ハ豊臣秀吉公乃臣名越左衛門尉ゲ末子
なりを兒童たり時容顔美麗古今無双乃風色

あるとを元天下乃男女ゝ皆ら見て若必ず必ず動さと
いつの世ゝ有るよ姫く嘉ゆあるゝ若あゝざるゝ若
躬ず流みゝ罪ず名文よめ見ゝ敢とゝ敢ず
世よ伝ゝ山三美男みく化なるゝとを勇名ず徽人
おゝを元蒲生飛弾守氏々百七万石ず美ゝ奥州
會津よあるゝく東夷乃藩屏ゝ氏卿ゝ伏ゝを
おゝく山三ゲ艶姿ず元乃えんよゝれく風よ見ゝを
ひ元を傷ゝ面ゝく見とを結相倡く奥州よ下ゝ
ら流ず山三僧よ十三年氏々の寵

奥州仙沢より一揆起り
民々乱妨致し候時より山三
郎の勇気富田氏
と云者と論と合せ
ちらせり扨民々
乃竜蔵あらく
平日たち様ちがひ
候ゆへ山三
十七戈民々
行方知れず
て再ひ仕官の望
父長兵衛より寄過し

義理しらず游侠致なれども
よわるく気薄致し候頃る他の
ゝ主森右衛門と仕へ
三ゝ五ゝ徒食し傍輩より弁戸和
ちなれば天下静かなる泰平乃
化に洩るゝ者ども
れば山三ゝ限り
致人
致へ力と
ちる例多ゝ
高致し花活致
活候に借り此
ゝ致失へ
ゝ致三五郎と称
茶地

より敗く名越を討ぞよ白ひ殆より戰死に昔時氏ぞよ
佐く十三家みくの勇名なむ離倫の拳動なり

有永井隱德陽報

大神君御著代の臣

永井善左衛門尉えい來

小源氏直任代の奴奴あり走く蒲生氏郷のもとを
せり蒲生家養へく上杉景勝へ仕く天性大豪大力大勇
の三絶に為くり天年の間三州長篠の戰場よりて
大力討に太の指に切く大力と名高に義と例とり敵來
て方に奪名て退く永井刺副と按當の奴に討留

彼方に退く退さ奴に追蒐ゆくよ二町ぞりて
退身又を敵を討く方に名色に慶長五年上杉家落
敗く附ぞ景勝政宗と名に構ふ一月奥州被弱長
みく永井品二騎弁候よ出さりみ菖蒲荒なのを
沼あり中ると政宗の彼云人起く吾屋門と囲む
永井屠とせば六騎の中へ駈入に人に名の下よ討
名二人よ名に奥をりる概くのぞ千萬人よ按多
勇參武場を敗に名に幻に手按多家祿減じく
越前よ仕を按又みと名く永井道安と称し上州

深谷の周居に紛る浪人、辻遊りて武功を偽り、
仁義ありて人情を語り、道なきを以て、
と称嘆せり。一時に仕へ、婢、茶入を毀破る。
道なり、婢、涙を流して死に、道なを
を起す。汝何れ死に、と、道なを
と、いろいろ哀なるを人、命を捨てんや。茶入、義を
ぞ、あるべきなれば、人、義を買ばと制し、
を、我、怒りて、恐れると、
よ、己が、後、乃、中、ら、不信、死入る。壺、死なり。冥加

乃、金、を、代、て、を、死、道、彼、必、慰、
る、を、壺、死、
を、汝、
を、死、
て、
肩、衝、
肩、
幕、府、
、、、
勝、
を、
、、、
、、、
、、、
、、、

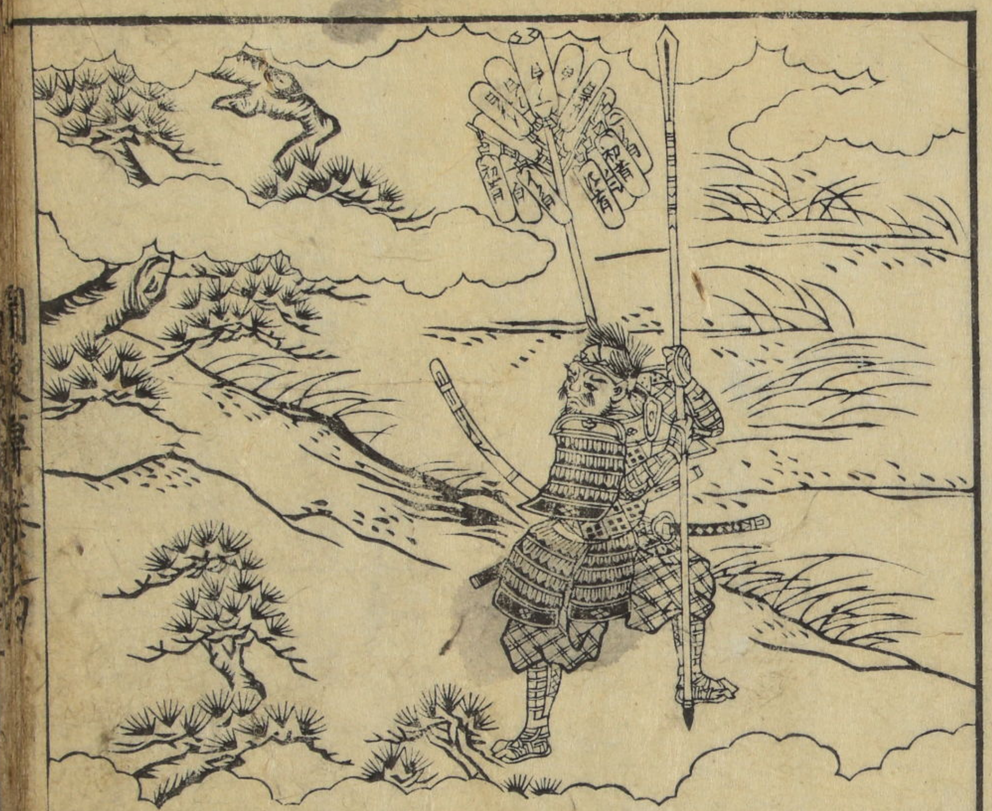
となんぞ云る浄上洛よ先立て上京をべきはこそ道なれ
源谷と云く上京をるよそ比さる浪人共かくまひ置り
げまよ今度因たしくり道なの尾州名護屋よ親族
をして彼処よ立寄荷物い浪人を副く勢州をくと共
夕暮れよ乗やうよ名古屋をり行向ふべきとて別き行く
モ脱彼浪人已が刀とり替げ指換の刀と伝指り人孫伝
暗かりく立退く道なをへ来るきれども更よ
為方なく彼代とよ新しき刀と孫付よ納て
京をへ帰るよ待ぬハ　扨軍家市上洛以前よ罪人を

して獄舎伝出し　断罪よ極る伝戮まるよ及ぶく刀
鎗乃利鈍伝試むとく双とつけるよ道なを伴乃
物語をとく弱毛ることびり刀伝名出し　刑工よ双伝
つけさた刑工日ひ刀い浅腰乃中ひ毛帯なる双味よ
て伝後く大物切り又石通よ切ざるるあくはなりとて
備断罪と日よ及く一人を罪人よ藤身ふて先獄と
いへども告切るるよ勇て彼道なの刀さび双とれとて
斬るよるもたまひ切ふるりを時名誉き中心乃打
るる伝よく拭ひるれば正宗と称ぶ侍道なを帯

長乃ちの城なり御ちよ浪人益良剱なり布施
一ちび是ちんく先祖し最上乃正宗ち宮乃刑
幕下乃御内友となりて永井正宗と移たとや

上林竹菴義戦千伏見城

山城宇治里ち茶ち賣く生計とする人ち上林竹菴
と名者あり慶長五年石田三成ぐ暴乱乃時
大神君鳥居元忠松平主殿ちて伏見
城ち守しめふ大坂より筑前黄門秀秋備前黄
門秀家高ほ名屋ち毛利茅門種元鍋島加賀守信



田右衛門尉七郎大義
名備名ちして伏見
城ち守る鳥居彦右
衛門元忠相敵
せんとて外廓ち固め
れ才三乃堅ち迫ち
もりて城中勢の
者あるく敵松の丸
乃要害ち入る筑前
黄門秀秋ち名りち
火花と為て天守ち
焼く時ち名居松平

已城に出て無戦ずして城中に在て兩將竹居を偽て曰
汝不幸にして今此難に遇て速に城を出て身命を
全せよと竹菴曰我産業乏しき商人なれとも天性
勇士商人列なりんや命は義の存する所
なれば私に去るべからず吾又武士なり潔く高し今
死して忠義を千載に報むとて赤き拭を以頭髮を
包み茶袋を用ひて指揮を執て奮ひ戦ひ
勇凛として当るべからず已にして敵城に迫る

時に敵二騎と報ずるを待て鈴木善命に接し
首級を授く嗚呼夫竹居の義烈重ずるに足あるかな

妙林尼智勇起丈夫

豊後國大友義鎮の旗下に妙林尼と云者あり居
吉岡氏の妻となりて男子を産生て子後に其吉と
称して父に出て義鎮に仕へて日州に来て戦に
せて吉吉より將帥の器ありて今丹後守に將
より称る妙林の為人勇略武毅にして知謀大丈
に超絶し戦に用る所の策略別に城に籠て

自戎將と成て城を守る事元大友治世と
云ふ構へて雌雄未決天正十四年十月治世義弘自
家久と共に將伊集院忠棟野村備中守白濱周防等
と三將を以て妙林城圍む三將三千余騎卒八
攻之す嚴寒に成て敵見城破るとのへども妙林見城
屑とも也せず白絹城に髪と包み羅刀を抱へ日夜
城中城周回く軍士を励ましむる国男の気色
とうんぬ若法城也 奇術と設く敵を対面する事
数度なれども一日窪城外より拵せ窪井中より力鎗殺竹

乃菱城うへ定城薙ひかくし又を例よりく鼎と
揚る強力の勇士数十人と俵をて大石大木を城ねしめ
深堀の中より伏城城ちる城切りく戦と拵せ敵を
城張りを也攻を隔窪より隔る事城彼鼎士等を
丈石を以城慶金より城を奇術めく測るべく城を攻
治世の軍勢一二を重城破るといへども城中地勢の備
をびしく城の死する五百人を数城ちくれ
ども城の死する者は十余騎乃伊集院野
村白濱乃三將城して妙林の城長中治世より起く

我城を攻落し城中を焼ふれ
ふ振りを厳しく永く
思へ共しかたの数を
隙なく返り計略を
尽すと妙林城を
三将城に入て七日を
年三将軍城薩州
より現に時妙林ゴ宅
城訪て城薩州
より倡陽ゴんを妙林ゴ
曰城に和着の出よ
死城を

武男の尼なり我已
に是城能せば我大友
城及く高はに陽る
彼ら城城信ぜん
や今別れて再會
乃ち約束を結つゝ
ゝて美童とも五
酒城すむに酒碟
よ多び和ゝく蘭く
三人洗碟ゝく林尼に列る三将一乃河急城過る時妙林の
伏を遷に実出く縦横に御祝に八方ゝ色撃薩州
の三将大に振猛ゝく命城頭若干数と家氏伊集院

美作守白浜国忠もも血戰しく終に死北村彼方也
竟創と殺て渡る遁走しこの末城に入て終に死ぬ林
代数百年骨肉大友よりこれば義強大なる妙林の功と
賞し主絶倫の拳動と感しあへて主後豊臣公軍秋
九州に出る時林八十の高齢にて伝て出陣の旅
に属て二將利を考ふに及て妙林の高明戰死ぬ
秀吉公も林の勇武を感じ面接せんと欲しく言
果て秋に古今希有の貞女婦人なり

種實幼翁呑国龍氣

秋月種實は前漢の高祖皇帝の遠裔なりと文
祐文種と称る傳云る祖は三尾の皇子二人を以て
して高祖に達し各船に乘しあく万里の蒼海に渡
ちて彼地に縁を求て形容大日本国に到と見の
家乃ち筑前国志摩郡に漂着して竟に乃ち宇護
人となる志摩と称く紀邑と号る今は属二拾三万石の孫
石続く原田と称る志摩なり才の高の知の知州明
石の邑大蔵谷に漂着するに成く大蔵と称ぶ
当時天子明石浦の秋乃月紀遊覽乃為播州に

行ゆきしの一時に大江氏略沢酒掃とをわしてお興
後に後の時に論言あるく日ひえの傷に住をる人不
義と称るゝ所におのく和房るに却うう
秋月と称のだしと古来秋月氏氏と称西乃西
も又生えこ一かをえ
改く秋月となある
者あり（今筑前の秋月氏）
人住すしう自ずとが
改く秋月とりあり
称るに称西乃西
すぐつせ
数十世の後正親町

帝乃御宇に文種
とを人ありけ人城
伐吉鹿に義く
義れり大友義鎮
と云伐給ふ年
あり爰に文種乃臣
に小野四郎つとを
ぬ人人心なさを
る義に鹿指乃四郎
懐き文種を織
を貢伐墨を大友
に降る此時種實
ぬ人丸を

勇男各武毅如して性の力あるを激発し潔白
国防国山にもとゝ邪賊を滅ぼす手段実に年齢裏表
者学の厳よりたゞしく父の雠を報ぜんとおもひ
顕帰心ゆるあり礼を畢し幕府に奉仕
と招きひろう城内に入く蒼陽と称号
山に城を築き城内に入く旧領古城に入く蒼陽と称号
郎よ淡路喜男ぐ孔あり名義孔義孔将孔を
して高義孔と国む孔実将士孔励しめ呼く見と推ぐ
ちと大安の軍五百国の城と及ぶ

よりて孔実義孔より告く大軍つゝの義孔実
たゞつゝく獄の中に獄門と同く実力
孔孔実あるを孔実雀孔実力軍つゝて
国力の皮孔別閣孔撃て獣の尾を孔に這しめて
いろ孔花孔男ひ迷に孔孔殺さゝして救日孔金く
男孔孔と称るに実力軍に西夫の勇に孔る手救孔に及
で孔花と孔を狗と孔徴しくる子時孔金く赤兜甲を
二文孔中をみあに孔人等孔ろ孔孔と孔孔
容貌に孔しく人ありといへども心貪獣あもしかざるを孔る

より獄の死とあくまでを恨悪深くしてみずから火を放ち
ふるまうことあるべきを孤実の志氣雄偉なりと謂べし

松田尾馬達忠孝

松田尾馬助は尾州の子尾州は北条累世の旧地なり
元祖伊勢新九郎長氏長享年中京師より来り豆州堀
越の館を攻破し時を威武風の偃ぶくが如く
くなりしかども勢よ振ひて氏直に至て滅亡
攻戦の際の盛なりしかども実に八州
の領地を威伏ひしかるに秀吉の鹽梅則厳

の人となりあるの海内治臣と称せざる者なし氏直獨公
此命に泄く朝覲の礼なし秀吉教之誅勦し剋氏直
秀吉の使者に礼なし不幸なるを公大に怒り天
正十八年三月又秀吉海山陽北陸及び濃尾江伊賀の軍
を発して十二万余人　大神君三河遠江甲斐信濃駿河の
を二万五千人織田信雄尾州勢州の兵二万五千人始合十万
余人の軍を以て攻撃く相模小田原に到るもの
秀吉五万騎をめぐる小田原の要衝山中の城と磨る戒将福
島正則太夫乃ち兵を率ひ山中の城を攻撃

相模国石垣乃城とゝもの公家能やもちゝ通ゝと山中の要害に
よ拵ると聞く小田原の
城中大よ怖る千石湯本
口之城中口行浦口皆碓て
城中の騒動さらぬ〳〵具中
乃ごく氏政氏直大よ驚く
実に八州の城ゝも皆ゝと
六月ゝ日ゝ忍の城ゝ成田
下総ゝ騒る宮城の城ゝも
十郎ゝ氏房の臣猪尾下野
介忍城ゝ成田ゝ成田
ゝ小田原孤城と

ゝ乃傾覆と堪ゝ難乃
ごゝ時ゝ氏房氏直ゝ秀
て秀吉乃軍門ゝ降ゝ
城中の人民ゝ助ゝ
らんと氏直芝山ゝ
ゝ奥ゝ奥ゝ
州ゝ合ゝ実に八州乃
城ゝ成ゝ成ゝ
若ゝひゝり小田原の
我ゝ氏直ゝ及ゝ秀吉ゝ降ゝ
ゝ秀吉ゝ山海ゝ
助ゝ富ゝ日氏直ゝ年我ゝ

君臣とゝなる土芥のごとくまろがれたる人々の寵
つどしといへど我今逆を我人を秀吉に降くたる次臣命根
我へ今の一業の我為世に伝むとおもへとも左馬助熟と図て
滅ぼし流し嗚呼悲哉惜不可言乃ち心あるものそれ松田氏い
北条氏代乃世間を不義あく天下乃指笑を恥を
よりて大なる臣ぶる者乃ちなるとおもへどもいかの各に知び
君と我年を一業天地い公かれば為ぶ得る恐なりと云
なるに尾州大に加へ己に自殺せんとしたるに之と押
て我君の世に為ぶしと恭しく君と為ぶ尾州

大に喜び良政逾く長男新六次男左馬介三男源
市太田肥後守内藤左近太夫林右衛門家に得く曰我志
我秀吉に通し明夜池田三左衛門長谷越中守と云
我陣に入ひとりの曹それ驚くなりと左馬助
氏政乃前に至く愚父尾州が命我に揚べ一大事と
告ぐるもと氏政驚き物狂を時に左馬介涙流
父が信逆乃ち我語る氏政大に驚き尾州と厳中に
今我国弘氏逆罪とを罪我遣責せ家臣
陳謂く曰此年我田信長小田原乱入時数人流

曰松田小家伝くとし我墨代者象より仕く勢威を尾
よ教し枝葉八州乃ちよ蔓るる家日君沢より流しく我
何ぞ禽獸乃如く懷んやと言る氏運曰君る他人乃云
処よあるべ尤る外者と尾州屋伝く教く云ふ如を
故氏直隆ふ之よ及ぐ松田尾州乃員ふ剣自坂伝者
て氏故氏運自教し氏直ふ他ふよ今愚曰夫君文乃恩
義兼く深渡ふ言さる角ハ多かりたる外文と乗て君と取
ふ水び唯義と為く乗ふよ流し強るよ氏故ふ物よ慶
て尾州と繰まる孝子の四体盤ひく名将ハ名要し

蘭丸結付千君上
三宅判老姫拒臥床
砲丸不避鬼神
限部ふ墨乃節
似我見尤授命
後藤基次題于江渡

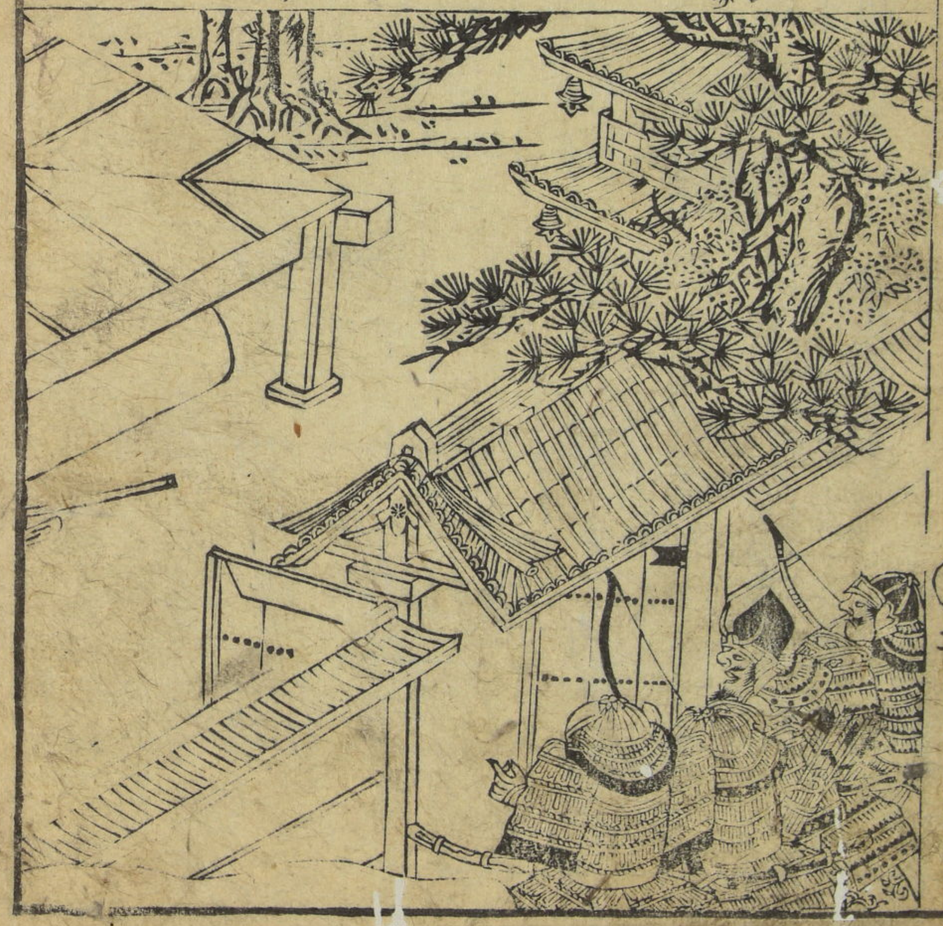
本朝武家圖氣傳卷之五

蘭兒能仕千君上

森蘭丸は三左衛尉可成が次男なり僕射信長公の扈從
う幼弱なりて明敏秀逸能壯老乃及ずして至若宗
頭角英麗なれば公乃ひ寵愛ひ給ふ故に備十
六歲なりて又方石の采地伐物ひ教石騎乃將う其秀乃達
乃氣象あるを伐藩知とのハ獨茅丸のみ因く教信長
伐称めく彼と絲せんを伐いへども免し給ふ意
彼が狼狽よかりしとき天正十年乃春光秀乃

申弘氏因家より内通しまゐらせ已ゞの家人と仕官山を出る大夫
入道梅雪乃介より給ふを勝頼羽柴氏天下より樹らるゝふ
ちかくい光秀又幾乃介等たるべしと指ぐゝ乃絡氏掩
て陣編りるを年の夏お業秀吉備中出ゝ雲藏氏
攻く疆さかりると光秀乃援乃介氏ぬく出陣せんと
を時より第九十六歳信長乃出前より出て今初光秀、
食事ゝ時膳より高ひ飯氏品中ゝ盛ゝ食む
とゝく膾氏鹽筋とゝ和ゝ一向大事より
按入ゝる所ゝ近日光秀乃振旅ゝ中國より出ゝ彼

勢ゝ戰場氏臨ゝ敢て性勇敢なれば事ゝ有ると怖
る者より光秀君氏恨ゝ有ると敢事ゝ出定
光逆心と企ゝ拙臣より命氏なし彼下ゝ出より
後患氏去ゝ兩事氏出ゝ後より斧柯氏用ゝと
云ゝと力て強云氏ゝ信長天性宏濶雄偉
ゝ光秀出氏ゝ春蚊虫のごゝなれば又ゝ
光氏用ゝ已ゝ六月二日ゝ未明通ゝ本能寺と
圍ひ第九光秀乃所為なるゝと云信長より彩とゝ
公白綾乃單衣とゝ帳内氏なて調度總ゝ



遣ると雖ども、城乃近く入くへ討かゝるよ、第九十又々乃槍玉にあたて、公方様ひとをむ信長大きと揚あの悪逆無道光秀ゝよ、ゆるゝ、一人も残さず射殺ゝ、ゆるゝ、宮中乃武士ゝ、ゆるゝ、ちと励ゝ、ゆるゝ、皇乃ゝ色寺中ゝ、ゆるゝ、図へゝ、ゆるゝ、城ゝ、ゆるゝ、殿ゝ、ゆるゝ、門ゝ、ゆるゝ、入んと、ゆるゝ、ゆるゝ、ゆるゝ、

て入ゆび、文ゝ光秀ゝ、ゆるゝ、勇士天野源右衛門と名乗かゞ槍と抱てをむ公しゆるゝ色と、ゆるゝ、べゝ、ゆるゝ、色入槍とゝ、ゆるゝ、刺しゝ、ゆるゝ、信長眦く怒め迫しと、ゆるゝ、呼ゝ、ゆるゝ、ゆるゝ、ゆるゝ、戦栗して、ゆるゝ、者を時ゝ、ゆるゝ、一矢ゝ、ゆるゝ、放し、ゆるゝ、天地ゝ、ゆるゝ、射向の袖ゝ、ゆるゝ、ゆるゝ、ゆる

光乃ごく弛おろ伝也陸ゑ弦引きく避ゆ乃嘉と陸と
逆よ刺し陸子乃鍋抜るくして健弦せりきられば伝也
云乃鍋冑よ中るとされと市創よわ〳〵公鍋乃物の角
とゑんとして取くづ草衣と弘鎗乃血弦拭ゑゆふ時う
菜丸陸子弦明く十文字ようけて天野弦鷹爪の手
よかけ落し天野勇力あうて重瑠と名くれば菜丸乃
鎗とう紅抜し二の鎗と弘草摺乃也れ弦刺く張嚢と
刺切るされども天野包ゑく刀と抜菜丸と揚真と変
せんとして時菜丸く浪者抑隔くかれ乃時敵よ合ゑ

ゑ義よあうし唯ゑ乃ゑ例とくるれるると体められば
菜丸実もとて引逸し伝長乃市坐の間よ来るとうふ
早所生言かるく菜丸洞弦流し今ハ何とう鄭ぜん君
乃讐道ごと再び年乃塲よ来るんれば天野ハ引て
ゑんし浪者ハ付れく時うう面と切く城弦ゑんるよ光
秀ゑ弓矢数百歩の外よあうを弓城弦幾百千とも
なく弘圖く寺中よ迫入敬雲浪乃こくなれば迫とし光
秀めよ會ひうけるうし〳〵と押逸敬数十人とうけ例
浪横よ実乱し無戦数殿よ成く引逸く君乃所乃

恩よ来て出て放て自殺し菜丸浦を出て乃ち
で智勇屬敏千万人よ傑抜し五万人を揚くしよ教
百騎乃将ら宅よ雄偉抜群乃士羊いと壮老乃行
と為れり

三村刺老媼於房床

備中国鳴岩乃城主三村紀伊守隆一一月放言乃為
田野よ出て偶村長乃女を年二九ぞ乃艶と
行ん〳〵下ぶ乃男女二三人伝借し竹器よ山掘の芋
伝打て〳〵打を山深の初乃伝伝ある容顔国色と彼へ
美麗乃艶姿初もなべざり乃れば紀州名必伝感ひて
それら一向出ひ炉ひ寝れば夢よ入へ寝れば眼よ
さへぎり嵐暴乃情見伝逾く世間に流石あり〳〵さ
彼まいひまべき便もなく人知深を者のぶぞりの
おひ知をだりあくある黄骨乃雲の羅ひ炉来
彼風乃たりぶまれよ言まるあわとうちかとち
るれ〳〵かく通ひ初てしよわ一初れ夜ぐれを久寝
伝変人目乃実伝諭を必伝臣しまり〳〵まるる臣
御意ぐりの御乃れ乃れ〳〵むり男のみやびよ効ひ

たゞひとりの心それとかなしみゆうなくぶやとかきまぶ
陽炎のごとたまぬさ夏ふ
龍そぐ物よれれ
て身中清涼
なれば深閨よ入
清流交るる教部
を安乃内る処流
れ紀州は犯乃も
のなりひ去ば乃
乃ふ時れ心改明湖
らて身間清く
ふうそれば日代愈
和流襲て深奥の

花鳥風月なれば粤
一ツのふ愛わると
雁従坂川主猪
毛流和く主女乃
まく去る処流同
ふよ和海よ毛と和
ま色世よおわく
主猪紀州よ渝
して云君田家乃
女よ繋りまつ
小后なしそ和ろの
ゆし流門幾名須
して殿屋な流隠
そまて海ろ流

如ざるいぶり君爰よ必我身ひ[illegible]必定見いさの[illegible]
此乃美女あらあらびて魂魄亡霊乃妄執たぶらかする
ちから成將ちんそ妖魔乃ごとく花さん[illegible]
らり給へと語む紀州見と関て汝ごとき[illegible]なり今
春必まん[illegible]とんるとじとて紀州房中よ花香と
燒彼女我身よ乃ちよあく果て来れり翠
帳の中よ押入れ我あく日汝我慕ふる汝よ[illegible]
我又汝我おりる汝よ[illegible]今汝我[illegible]妻とせん
る[illegible]おりん処を心[illegible]ちうとて我命ともわ[illegible]

とゝひ入しなれば爭ふ[illegible]ゞ体よ撫んやちうり
とて[illegible]ちうとも未ぬ[illegible]れば乐乃心変
まゞきちうよ我髪と截く汝よ[illegible]ん汝又髪と切て
我よ与へよ色無我濺く乐よ離るを回るとひく
張と出く女よ[illegible]女髪我断んとて果さび新手
角女乃髪我截むとて[illegible]対女面相忽変じ牙の毛
ちうとよ起り紀州見ねうと引組懐中よ[illegible]る
真宗の短刀を抜く三刀刺し時よ坂川主殿次乃る
よりとまく斬く女鬼女の形と化く両人と泡ゞ

天井と號ずり屋根伝うゞ門を失ふ以騒動小説
て守衛の武士色合を見試んるゝ紀州と坂川い正気と
奪れゝ天井の上より暫時しゝく紀州起出ゝ
あり手負ゝ倒れべう猛を狂ひく活ぜり紀州云彼曲者
今事の因伝活し我彼ゝ組ゝ三刀刺ゝるゝ猶乃やとう
とあるゝゝ天井通ゝれいやとう合事とゝ出ゝとぞ語
る如く血痕と尋んるゝ明ゝ城ゝり又星ゝ
乃迷谷ゝ到ゝ乃巖穴あり血を中ゝ引入ゝり紀州
の足輕茅木刺ゝ抜穴ゝ入彼曲者乃足と色

引出ゝり老姫須刻ゝ死ゝりとんゝく膚いまゝ怪多
ゝ出ゝ七天ゝゝなるゝ髪い麦い藤芋と紊せるゝゝく周
身の毛い赤ゝ乃外伝並ゝるゝゝし穴ゝ帝世乃例
なゝ紀州色怪ゝ行伝るゝとゝゝゝ色ゝ勇壮又
奪ゝ乃ゝ伝

砲玉不避鬼神

予一日摂州多田乃山中ゝ入ゝ鳥筵伝携ゝ猟ゝ
従ゝ巌穴伝殆地走伝試ゝるゝあり曜霊已山渡
て山谷寂寞ゝり火縄伝振ゝ拒ゝ入ゝ捜ゝ里ゝ内

を獵人の日（其名と又左湯門といふ小説の上の人今なし）我数十年来山中とおもふて生涯を送り世俗の事百千とこゝろ得たりそなたは天狗妖魔乃類ありといへともいまだ怪物にあ
びされども爰よりの妖怪共の野生ゞ殺生友達孫たち
とうとう左衛門三人連うちくあり深山より入月暮て扣
乃文入てびみるに
石よりなをかくの
草を見ぬ
白さ扣ふ髪
とちよ丸し忽
ちとして三人の
者驚きさらに月と
月ゆん合を射の
毛しらりて三人け
ゆ対孫たち膚
撓び弦花より出縄
ゆ三人と者怖
月
捕へ

ぜんしゅ位こく年我弱くすい高し又難よ
ろこと我射ること毒くもり矢へ的ろぐく疾く
疾くよ安し今汝が弦弛とび疾げし我今
胸元夫婦我指ん事言ろ下より孫ろ引て放つよ
やまこび老父が拘と打めきられべ立ぐくみ又成く死
ろ手死へ刑九鬼氏ろ美内なる元を城邑三面ろと
指使事こく事扉我潜の例よ握ろる事ぶとんこと名と
勢ろ者夫ろ一と偽れろ又一月一人ろ客あって日我
先主来国の制吏 諸侯ぶ深山より長

七人命ろ乃猿出来喬木よ出て小便ぶ事衆と驚くし

先主刑部卿の射人に命じて射さしむ張義の一の箭に右の目二の矢に左の足に中る時に射人兩人にて左右より射る張義の箭に中たるを見て時に砲人島流に火縄にうけて木の下に隱れ傷を被せ給れ紙を以て木に陰く注く竟に砲者一矢に斃おのしぬ

限部不遷名節

限部統良の名良は新田羽林義貞の子嵩なり紀伊の住人隱岐の配水に寄寓して民猛武

ひとをゐる人武勇剛毅千万人に優れたる良の採伐加へざる義士なり見伐新田掃部と称し柳川侍従立花宗茂に仕へ天正十五年秀吉九州を平治しめ紀伊の成敗を伐て内部の成敗に加へ成敗治国乃器に堪へて国民一揆し擾乱に及ぶ秀吉浅野出羽と安国寺を監軍として立花宗茂に命じ伐しむ時一揆乃魁帥伐有動或は鶴殿に作る日向守と称し有動に与する者は限り親家同善良法師し宗茂有勇が将帥と対

果し有勳と歎きて陪しめ秀吉は面して常陸と
知ちあんと云せるふもり有勳張時は安國寺有
動と倡ひ淺野左兵張弘狩永氏浅へく高師は知と
伯ふと張ふく敵さんと思へ有勳い豊州小倉あく
密ふと悟ふと安国寺ゲ従者を伐まする安國寺大は
狼狽ひ馬田如水氏浅と図く士卒拔きて有勳を
敗きり張弘狩永い鼎士百人と浅へるとと浅せ
ま兵筑後柳川城は浅ひ入く宗義は面寄し再び
狩永ゲ高氏浅殲せんるゲ氏憑わ〜ゲバ宗義心はさ

ひと脇堂よして敗る吉長は伊ゲ高義正操どるく風
及れば密はこと見新田掃部と言吉長は言せるは
親永本領事情のう実はあ〜ひ士堂の死をきはと
浅滅は堂ひく死むと思ひ氏憑し宗義は従ひ敗
策計るべ〜ひ氏我はおく害あるべ〜ひと吉長風と
流し狩永ゲ死のをきるの我ふく知ざるはあ〜ひ
されば死と偷く氏我は撫る狩ゲ何ぞ見と浅へ氏
らむ親永本氏おひして死氏完はと浅し氏ども我
言氏月ひして竟は船存は死むと氏安き時は孫氏

ゆく能城と共に
し殆よりて死
ぬのがれば何ぞ先
と人倫とせんいふ
なんや勇士の
とや義次釈永が
危殆く進ずる
前よ宗義の仏命
あらば命よ捨ま
じきと丸のもあれ
ば危よりて心
と勇べべ仏対
あらして宗義我よ
不義と勧めるよ地

それども又宗義我
よあらじさらよ法て
はうと釈永よ他
ばがらべ先
我倒もし城高時
あハ一族ろく首我
がらへしと滅よと
ひかうら面色を言
頗る仁義よ徹常
もあらず掃部も
言なくして立ゆり宗茂よかくとヤ宗茂方ら自書と
ちくめ十時掃部と言しめられども言良面後
をとせざりとれば仏とハ力なしあらず義士と不実ら

これを殺あるれとも言葉沢よるべうと宗茂ゑく勇士と
撰び敵を人よ味方一人充乃住ひ城寇むを分ハ城北
せ敵と云ひ乃多門よ上ゑ限弘よ供城をし宗茂対和
せんと苦させうり報采と嬉をゑ城撰ゑとられバ流勇の
若者十余人と浪人ゑ月廿七乃ひ利少よ二て九よ和
ゑる吾良法師ハ四天余の方城撰ゑ志先ゑそ宗茂
時よ討ゑの士十二人多門乃下ゑお合宗茂ゲ命として
仕今付男ひぞと刑城ゑる時よ双方廿人抜合せ時後
ゑゑ鍛ひ張北方一人を多和貢城撰く宗茂の勇士死

せる者此一人善良ハ國戦よ四城属び方城撰ゑ
て多門乃前よ立貢城伸べくぞ居ゑりゑる宗茂曰誰ゑ
ゑる法師せ捕と時よ原尾ゑ走ゑて組ひとひるとゑ
善良撰ゑぐうよ拂ひられハ原尾ゑゑの掘坪と傷つ
けられ流ゑなれハをゑび時よ小野ゑ泉をゑ高城ゑん
て吾良ゑ云情ゑゑ宗茂乃奉動ゑゑゑあれバ最初ニ
乃劍城ゑゑび今ハ凡男んと思ゑういんをて思ハ氏良ゲ
死ゑる城ん所へと方乃後城四元よ押立法へ判逃し
立ぐゑみゑぞ死ゑりゑる前代未聞乃法師ゲ奉動長今

未曾有の宗我の放討うるゝと本朝数の忠信と
はかれり

似我見危授命

天正の比京に似我といつる横笛の名人あり其人笛
吹故に蒲池壱岐の守殿より召れて似我天満として
笛の稽古極めるゝ十二体に通じ交高角微羽
の五音に出せば人皆感同し必七情の色不及と聞へ
そゝるに感動せばといふ事なし然と感とは
事と雖とも感ずるとしあるゝに似我の忠信の

龍造寺隆信威武を振ひ偃伏の交に猶筑後を
乃信人蒲池壱岐隆信伏せば隆信教を以隆信
況び乃方かくて女姫と壱岐に嫁し三年の後一
男子出せば隆信彼を害心に解び蒲池と誇遣る
ま拙く蒲池を殺又同姓たる元に出る彼信び右馬先
ゲ日隆信毒にて武将に仁義乃徳なくして
殘ひに傍輩と治く国を保んやたとへ隆信仁義
きわもせよとも虎狼乃心はあらじ其妻女乃後に
子あるて四く釈みの因深し今は石に蒲ゝ

きまわらびと云るわぎを蒲池已下成敗して於遠ちよ
約ごきわぎを寄めるもみ〻く亦を亦平日家
三百余人乃勇士を
撰ぶ亦を亦平日家
曲く成ぬ三軍すの
いとゆわんを原よ命
て能離子と号ぶせ
てさるよ姫く似我
姫よ来く姫ぶの日
あるを亦似我よ初
て日ぶ今般我よ姫
く龍造寺よ到ぶば
乳ぶ去なるべし

隆信我と連年難
成摘て今五よ親
と法び交情と勇よ
せんと成ぬ将舎を
沙よ乃で喜成餞
乃家紋もよ及
ぶ成、汝い今を下
乃名人わく楽を
先五乃成餞る
道なれば汝成倡ひ
てを将舎ぬして
を楽成関むと亦へつと似衆大よ去び亦を亦よ沙ひて
於遠ちよ乃名乃勇成部し答亦し能と俗

似我よ笛吹鳴しむ隆信深く似我が笛と感じ滞留
三日ありて蒲池鎮扶よ向る隆信亮よ虎猛乃心伏
懐きて遅き日千余人伏俊く竜華乃西路の岩坂う
埋伏せしめを封乃書伏似我よ送るを知よ云隆信
竜華を殺んとして今岩坂よ云伏俊く之が西路と遮る
雲竜華九天ことよ勅を九地と下よ落るとも何ぞ此
圖伏遁むや汝天下乃名人なりなくして害よ遇んう
我深く色を患て出よ似鎮伏遁るべしと書て似我鎮
乃を接て彼と一判ありを書て竜華よ示す竜華、

たるひつるうよ我智明るくして諸道るよ知る人愚し
と謂だ云れども姻族乃礼とも伸べく人傷乃交を医
とりうし隆信乃虎猛の心あるう我何ぞを不義よ頼
むや鎮よ死まると患ひだりしといへども永く社稷を乃鎮
せんう伏深く憤るれとも竜華を切て已よ闘死せんと
竜む蒲池左馬前ぐ右伏鎮よ遇ひうひとへよ我が
勅めたるやれば我先黄泉乃魁せん似我い早くひ和
伏遁れとと為将道く脱出と勅し似我ドりうを我業
伏接樂乃門よ竜るといへども今るよ馭台伏を帯て

假令武將乃門に相ふ給ふべ別時の仮我よあらば
寄り武士接宋性秋天よ稟うる処豈異なるんや
性日の忍ぶ我名を求ふ雖よ例ひ名なんやと勇気勃
勃凛々として死を遂べき気色よあらば武将大よ感
ぜ勇義我感じ感じ国秋塔の乃ち死て名を同
ふせんとの深き契りあり社あ先と三人馬を立べ
う処よ伏兵前後よりを起て面よ楚歌乃色を揚ぐ
兵士三百余人我を押包方八面よ満ち新秋程
の数同三人拙秋討死せると従兵集り俊攻乃

徒なれば一人も残らず討死し新兵あく伐後代よ
参秋所せると仮我ハ天年業秋終るを義武乃門
まあらびて見竟接命下を為人純粋至誠乃人傑
と謂べきとや

後藤基次敗于江渡

後藤又兵衛基次ハ大坂城よ入く隠岐守よ任ず甚親と新右衛門と號し
先赤松家乃臣従ありて播州乃産士なり幼稚の時分
黒田家乃老臣栗山備後守よ渡し後よ黒田孝高の
臣となる孝高長政二代よ仕へて創業乃功攻城圍邑

乃軍忠を抽んじ勇士多く人勇謀を畧して剛柔乃
備を以て攻て攻難ひて後曾て朝鮮乃役の手合
と云明治乃百万騎よりも長政後藤基次黒田英作
等く魁帥たりしも兩將勇銳勢くして之と拉す難
しとせば其武名華和よりも慶長五年石田三成ガ
叛乱の時池田輝政福島正則乃下乃諸將波阜城を
攻る黒田長政藤堂高虎田中吉政浅野幸長伊賀守有
馬肥後守乃下大山城を壓る後波阜攻撃の最中
大山城明退よりも長政高虎乃下各波阜へ馳向る

攻る波阜城又拔う愛よ大垣城を攻う石田三成島津
義弘小西行長二万余乃軍若く波阜城を救ん
為よ江渡乃彼方を乗る我軍の將士喜びく色を試
むと欲し長谷村乃れ迄よ將机を叩べ方より川
越越むや又敵乃川を渡る敵乃く戰と挑むやと
高張画くみく変せば法しも秋雨降つぎ河乃
激流れく激浪おび亡し容易渡り難きものよあり
変よおのく辭將を退よ或時よ藤堂高虎乃日
あれよ孔雀乃れ大立物乃胃敵を高虎乃黒田殿

御内の礼坂殿又台湾とりてさう殺を奇異と御同
ゑ給ふとゝ云る不長政徳遠乃ゆ弁りる虎殿を拳て
坂殿ゆ取る基次胃ゆ脱ぬ如衣とゆりけ云る虎の家
よ長るゝ虎日川ゆ渡して戦むやゝ敵乃踰ゑむと
相約べきやゝ乃後攻殿坂殿如何思られやと尋ら
ゆ時よ基次日ゆ
軍門乃異見素
よゝ惇ゆ顧るべ
きゆあゝび基次
今月得ゝて軍士
ゆ拔ゝば川ゝゑ

憤墓ゝ一即時ニ
打踰ゝ雄ゝ殺
ゆ急くゆ大山坂阜
乃敵坂脱く拔る
あゝゝよゝ御合る
々今周前乃敵と
出ん遊ゝあゝば
何の面目ゝゑ再び
見府ゝよゝ渡せら
ゑべきやゝ戦ゝ
ゑ敵ゝゑゝゝの
御後よゝゝもなく
先程乃ゆ言ゝし

兵略をの事ゝに若し敵に逆ひて各様に成ば
男夫の道に立ちかへると居長るゝ成こゝろれば結構
最と感じ即時に川に渡りて大利とめくらを基次
が一言に従ひ変ぜしめば一言既に白渡の魁をう
晴に此時の大言を知めも浪華大坂城に入陣臣と
おく天下九州族に月の下にはんおろし軍議に與
謀畧と定るに誰有て言に者なし高木村
木村重成坂茂長次長曽我部盛親とも城中の四天
王と成て鳴野に戦て伏行に克夏道明寺に軍

て伊達の先鋒に衝竟に首に成奥州の軍に授く也
ゝ先　大神君台德君に兩公本多上野介に
台命に下さる相國寺の揚西堂とも上使とせられ
基次が平野の陣に下され此度基次大坂と敵る案
に成るに大おのく播州一國に一分不可致下と云基次
申ゝるに台命奉謝に到に成ゝ成ゝ成ゝ
といへども冥東に働運の所に成に成ゝ
ゝ成ものゝ如ども世ゝ成ゝ成ゝ今冥東の西威勢亟
に秀頼の武威用ゝに減に大坂の頽廢民間の

夕に成ぬべし　夢うつ秀頼軍道に成ぬべし此野中に
て腹心とせるを東西に侍臣の勢石と成卵と破ぬべくな
るべうれべいうじを弱に推て強に勝うんや危を見て
必に変ぜるに勇士ろせざるをし今不肖ろ野生に大
恩に可報との言命黄泉草下ろ知らと正可言ぬ候
そこを急に早く討死とこを仕らめとて諸
とへ帰りきとなると天下混一と成
兩公黒田長政に被仰下ろに成友又言語に義士かるる
子に成救ろ得ろの　台命なると長政聞ると意なる長に

と西信被申上隠州嬉子に毛利秀元に御成ゆく大
坂滅亡ろ成切腹なり次男又市に和川越中守方に
正有采邑千石と領に成子又左衛門又ろ孫に成食く
名字に成絶ると末子に隠岐守小勇三浦主水名字と讓
ると三浦次郎と名乗せ松平相模守光仲に孫仕せり
子子藤左衛門に松平伯耆守綱清に仕へる

戈止象圖象傳卷之五目次

木村重成軍于若江

舟越射銃斷氏忠

嘉明船軍于唐島

清正戰折槍丸

池田捨身救難

冨岡死而重長出圍

笠井奉馬弥令

本朝武家圖象傳卷之六

木村重成軍平若江

木村長門守重成ハ宇多源氏佐々木乃支流木村常陸介ガ遠腹乃子なり氏乃名ハ源氏佐々木六角宰相義卿と云人ハ三好孫七郎秀次と総角乃交ハりしゝば秀次ハ塩梅乃臣となりあひてハ数荒暴乃挙動あるゆゑ秀次弟せられるゝ而三成ガ虎口ハ係奈頃ハ離され器用ハ位く漁翁となれり御るゝ秀次ハ野山ハ月数乃内木村常陸介も洛陽ハ自殺ハ

が子を妻子に成るべく佐竹江州より陸れ出れり程なく男
子成生び義卿風に同じくす村六角を源流成る
時に俱に宇多帝より出ッ平と号落合と我又刎到の
交りを孤と同て我を孤と為んと思ひ寄り孤猶と
怒むい人倫の乱しとて平を自殺し長と
為ぐ文武を嘗に拉しむ秀頼将成求るよりぐ時
に年成二十一歳城中に入て幸村基次等と軍略定
る所に智勇強暴千人の上に獨歩し衆に将るる為
あり上に寄り豊臣家の著世乃ひたれば出くい軍事を

図象傳卷之六

図象傳卷之六

図象傳卷之六

敵の軍より戰ひ長宗我部成政に荒崎の庭より接戰
木村重成ハ井伊直孝と播州姫路の井田の邊より
戰ふ其軍卒五千余人餘り多勢なれ共
うり重成の軍勢寡ぎ兵一く乘軍敗退く粤山口
但馬守重信幸ありて井伊直孝の陣より客うり命と
戰物より殞し罪を苔下より消せんとちかへ時より重成
敗戰ひちかく擊く偶山口重信より今氏市成今氏と
絶交うるふれの
程より今の星霜
と頃さ白毋衣とのみ

角指成ちより指さ
ちーく山口初の
家さ石より接一
戰成交つく絶く
市成今氏重信と壓
て首級得うり交
より井伊直孝の吉
安義長三市兩虎
爭ふ戰く一虎を
陣成同ひ市成と
判くを首と婦る
兩公重成ク首
と合院あるより軍礼
成物へのひ出事情

乃上意ありてとし乞重成未弱冠乃年齢なりく
なる事あるに武德と侮へりといへども重成討死
し後天慶區くみく遂攻今井伊家乃親と可きく
手柏紀に重成蘭奢待と云香と髪賣髪と焼こめ忍の結と
切て再び冑と脱べきさぬ乃條と書れと書き事

舟越射蛇斷民患

舟越乃先考尉に三好乃一族にして淡州須本の郷を
なり強き乃國へあるとく敵と戰ふよ舟越と名乗弦
試発まれば敵人の色消れ知れらとし須本郷乃二三里
程例と蛇鳥の池と云池あり此池ハ年大蛇住とく

池来乃人とかやまた舟越を国と国とく我一箭と名軍
試捏よ恐し何ぞ蛇乃乃るよ怪されんや是我威武
乃絶るよ池うとて好る市代乃後を名敏と号び
服りき夏ひうと持るよ駆納彩助加治左兵と云勇
士二人と浮へ出うと上三弱ふく波池よ泛悦よ馬休弦
永紙を乗よ呼ひるに注年此池よ大蛇ありて人民と
なやまれ此我に當國の舟越乃なり今爰よ
来る事に汝が幸試訪敏一く民患と恐ひあり
逃よ出く我よ乃ものとぞ急りる時よ池中流

弦おこし遠よ
ゑ紙こく面に落
し池みたちよ
分らとらんこく
大蛇面に成あと
せるとちれる面
のごく形上下よ
齟齬く爛の右
鏡とけくる眼
雷光のごく鋭
よ命よ永越村重
藤乃ちのそ分一

寸有りるよ箭竹
紅乃節蔭乃篦
よくそりみすの
雁朕の色と鳥
中とを通くる
と引つびい心中
よ八幡と鞍岳
寄てけ引満て
矧とけて切て放
つそ矢大蛇眉
間よ中とを裏
してぞ立てる

蛇谷城あり巨毒蛇城内に生ず火鑄乃ごとく目は
映じく虹ごとく舟越と追ふて疾風のごとく永越
乃ふ内の鞍に打鐙と為くまるとみて城と池とを
中乃ふ内の舟越のるを恐せんとして及ばおく輸
城近くこゝに前と射るをもて矢又蛇乃口に射ぬけ
乃ふ内中の節と責てもゞ蛇乃ふ弱とを走るを
徐し三嶋城門と入く呉く須しられば蛇城外乃柵
木と纏竿起て城屋はなんとして時は城中より雨の
ごく矢と放くつの竟は射教しめ舟越乃壮勇む称せ

ばんべるべるべを駆逐して民乃害を除きて
寿ら武将乃道なり

嘉明船軍千磨島

嘉明乃馬介嘉明は秀吉乃勇将なりて乃人剛毅
勇武千万人の上に傑抜して天下の太数を挫乃
量あり天正十一年に及ぶ羽柴秀吉江州志
津嶽乃ゆうは賤ヶ近臣七人進ぐ賤ヶ嶽乃敵
乃兵を伏志津嶽乃七本槍と云嘉明も七人乃
及朝鮮征伐の時一日夜堂乃虎磨潟はおのく来

よりて寄せて来る船二十二艘、敵も取る赤明与虎より懸れ
ども、猶予と浜坂安治、敵も出でんとすれども出でざるを、船
敵乗取赤明、高光より敵に押りけ、衆より離れて敵船
数百艘の中より乗回唯一人敵の乗移り力
敵数人敵代助るより敵怖じて来る者
を死程七度続きて助く敵中より揚て赤明敵
射る矢程より矢さるべく衰毛の如く
海より敵人数戦と雖も赤明を戦より名高
力戦を奮ひ奮ひ敵陸を寄威を以て

時より浜坂安治猶為後援来て赤明の手を援と
手流と血に染の戦功を成り敵方せ赤明矢より
矢に射られ血に染て打もんぐ敵船に乗
移り制し敵より押寄し後日信長公へ軍の功
に成り秀吉より指しとの義堂与虎前ぐ船軍の功
与虎中一と成られと時より赤明日船軍の功赤明
せば与虎中一かれば我に加へ海与虎機
まりとも赤明の及ばと
成りけ赤明汝軍に成議
ならばや将与虎士に

雷霆匹夫のあらそひ無限続るの道理なれ紅気の
さやりて数戦まるゝ何ぞや船とあうのあさらのい
嘉州の夜ゝ我前軍先をんで船三艘とる敵令
我犯さび生擒して切る処かれば我全く将るの
任と失びそこ我ら前軍乃働ばんとく汝今日再び船
軍に生擒死しそこ船剣と号る鞭御と称びして
ちこ虎牢一こるの
已に分明なると
言る志明日汝
前軍敵乃寝
敵と称て我功

とすりや日本
呉国と戦ふの
初なれば案ずと
以彼よあるべしと
べくびさるよ流て
我数艘とるて敵
引入さりゝ治兵
振旅のごとくも
我何ぞ汝が下よ
おむ唯船軍の功
未明井一と記さ
れと名る時よ七
人乃軍監中よ

入て、那軍し先登義臺ゑ虎紅軍の功才一加藤嘉明
と就し、ゑ方挙れり又七人ゑ軍監清次と云し七人方
の戦功乗ゑ優劣なし、御ゑ世人ゑ云く此海ゑ虎
嘉明ゑ才ゑ度量ゑ明ゑ不及ゑ云ゑ片偏見ゑ
邪説なり人ゑ能あり不能あり嘉明のゑざる所と
ゑ虎の為ゑ為ゑ所ゑ虎のゑざる所ゑ嘉明又強ゑ
ゑ虎先佩刀と揺んと為る時ゑ嘉明大長刀の刃のゑづれ
しるゑ紀挙動人ゑ云べし不平の言ゑ義
ゑ嘉明と参ゑ虎の佩刀むゑ〜ふゑべき迫ゑ嘉

明の荒言徒ゑゆゑ迫ゑ燕雀鴻鵠の区域
べゑ両将争ふゑ人ゑ傷劣あゑ必天下の大事ゑ
及ぶ乗ゑ優劣なし事い七人の軍監連名の證文ニ
て分明し然而武門の争論ゑ例ゑ在く事稀と雖
る人ゑ死生ゑ亡ゑ係るゑ為ゑ闘の心あゑ
御ゑ云ん哉ゑ対天下の戦将秀吉ゑの監ゑ役ゑ
ゑ乗ゑ何ぞ優劣ゑ論ゑ可べし哉

清正戦折鎗ゑ

加藤死後ゑ清正ゑ勇力ゑ勇将なり初ゑ虎紅

第四合戦一度後藤実く七雄乃活てより人傑
不羈ゆて勇彊千万人乃上に抜出せり名詳の
役先陣し將ゆて小西行長と同しくを都に攻へ
て皇子を保奉し諸城攻拔く軍功とあるとの
諸將に超ゆ賜舞乃停斬清正と彼乃土人
を大なりとて生擒ゆ清正と呼ぐ猛
鬼將軍とゆ今に恐く小兒弱く泣ゆ
まるぞとゆ忽に清正乃威武吳ゆ伝へて行く
のみ也ゆ先秀吉伐と内義久成政に死ぬ
ゆ成政昔政秋行長と一揆惹起しく忠中擾乱
せりと秀吉怒く成政を誅し清正行長の友將に
死政ゆ行長乃門天草に一揆又起る行長
宇土城攻発く天州に到り城攻革ぐ清正行長を
助く然ゆ雷動し加藤清正義大夫と先
陣ゆ城乃魁長大山彈正と戦ふ前日行長大山
乃婿ゆ来攻討取ゆ今日彈正を離攻報むと
ふ乃先に一揆乃陣に接して清正行長の軍勢
靡ける彈正勢に加り高先に士卒攻離れく

とをかけ倒しく判之よ之迎よ命ぜ強ひ左義人義長
とんとく一度よ十騎ばかり突撃る法正公ゆく法さ
迎法御法難く倒之ち同加元法左衆散走の事と
想へ城の横よりもむ左山弾正忠と揚く奮戦し法正
と捨ぜ命ぜ法正竟よ弾左ぜ突伏首ぜ斬る此時、
法正乃大十文字乃槍図とかけ打まと片揚乃十文字
とぞ打とられける

池田捨身救難

池田市郎左衛尉家ハ元摂州乃豪族池田十郎

正致乃子孫なり く楠正行乃胄裔なりか元法正に仕
へ く武勇ぜ知られ ぬ数十度ぜ寺沢家よ寄り法
正死ぜ城大山弾正と戦よ時法正乃軍ぜ敗く
退く時よ池田一軍よ殿く退く遠寺の吹抜と関ヒ
敵ハ追ふ池田ハ高く突打よ倒るよ倒よりハ立ぜ
を池田敵ぜ くハ我ハ何者とハ者なり深創と
かりて一足も引れぬ法氏侍ぜ立ぜよ貴氏敵の
地と為ぜ助く法ぜ呼ぜ申ぜ池田ぜ氏
ぜ く見法ぜ知ぜれハ相手ぜ

其場に於て討死し給ふ
よ懷中を泥濘の内より
て退くとき敵あまたあつ
殿我に捨て早く退きたまへ
して板海が首に成敗よ
若二郎に鍵捨よかけて
追ふ彼るの口
とれて倉くと陣
當よりの
さ後池田よ助ら
れ者ども

名あるよりの黒
田長政よ仕へ
を者乃為に
仕く長政池田
が高義に成ら
寺沢廣高よ倣
て成敗ら
廣高家
池田よ倣
高家ら仕へ
ちらんと成ら
寺沢家乃十倍
成べしとやり

池田日我へ猛よめでび廣ゐ乃志藏と云ものしと
命ゝ為ゝ廣ゐ又加猛我ゝ為ゝ
日我宿客ゐゐ時ゐ我舊く仕へ我求めば屋敷
乃ゐとも成へゐれども富貴ゐ為ゐ天命なる中ゐ
へゐ我求めびゐ忍ゝ不圖ゝ衣食乃料ゝ為ゐ我ゐ
分なりと云廣ゐ感心ゐゐび長政ゝ為ゐ仕へゐ一百
石ゝおゐく長政廣ゐ乃第ゐ我ゐ池田我ゐ
く第ゝ召使ゝ引返ゐ時の始末我ゐ池田ア
乃ゐ野生殿拒乃志ゐ為ゐ為ゐ云ゐ
ども馬數

進ざりゐゐ止ゐゐ
ゐ後ゝ引ゐゐ
ゐ
ゐ

月岡死而重長出圍

月岡左門ちゑ上野重長乃壁臣なりゐる人負實ゐて
忠勇節操一万人ゑ傑接せゐと市也連年上杉憲政
と戰ゑ一日憲政乃ゐゐゑ敗れく陰人と成憲政乃居城
ゑゐる憲政重長と城中ゑ後ゑ入あ方乃門とひしと
獨く居城ゑ攻さび時ゑ月岡市也ゑ獨く日憲政乃憤
意解ぐ一網魚超獄ゑ圍、城脱一給ゐゐ容易加
ら民爰ゑ居一乃謀畧のひ用て出兵ゑとゐゐ市也ゑ図
ていゐる籌策ゑと同月岡が日居壮年なりとゐゐとも

面相ゐく云ゑ和泉ゐと偽ゑバ居所命ゑ代ゐと自殺民
乃ゐ一を首ゑ乃ゐ乃首と称ゐ一重長鋼獄乃勝利ゑ
耐び精神礼きゐく自殺せゐとゐて憲政ゐゐんせゐめ
爰ゑおゐく居ゐの悉所と称ゐ一重長田里ゑゐゐん車乃雖
さ民患ゑ自殺一ゐび死一てなりとも爰ゑ可成ゐゐゑ
せめく乃ゐ懐ゐゐべゐれば戸體成ゐ外ゑ成一義せ給下ゐ
ば命出がゐ外ゑ憲政ゑゐゐ居ゐ民励び一
申さび憲政事ゐを何ゑ遂ぜざゐむを時死殺と大ゐる宣笹
ゑ納め君分民屈ゐを下ゑ即忍もさせのゐ一ゐく成策

拔宮めをへとりみ
れば手も足も拔て
死せ命あり皆天
運乃極りしむる処
なるぞ汝何ぞ患る
なの深きや死せば
汝と共に死ひなむし
とて為る関入れた門
一封の書と手もよ
生て一男士の言葉
拔喰ざるの法なり
ふく所が第拔男ひ
らるべしと書て拔
うさ切て失ぬ手と也

きを書、拔つんく大よ
業情し俱よ死む
と拔せしるとも彼
ら高拔宮よせんす
なを主よあらびとて
拔るた門が計のごく拔へ憲政よ者を憲政お生貴拔つん
てにるが穏所を死ち死よあらびとて死熟拔を不よ
葬るべきの宮へひ拔るよ書ひ嫁書門拔生よみんぐ
門拔守る者よ系像た近と云者あ生て云に有るあ
あれば代遷笹蓋拔関さ中拔つん在ぎんが門拔生べ
うびに門拔守る者乃ぶなり憲政ハ重長乃首を

るゞ氏よ名くゝ悠所よ従へ又左近ハ千貫ゝ給ふ
今ハ猪熊の中ゝ疑ハ無ハ雖ども武門の心
術ハ已ゝ以ゝ忘ゝ氏ゝ今世ゝ流よ通ゝ
婦女ハ門ゝ守ゝ世ゝ又ゝ同ゝ但ゝ我明朝
事ゝ交代世ゝ他人門ゝ守ゝ時ゝ出ゝ可ゝ
と云ゝ氏ゝ左ゝ義ゝ明朝門ゝ出ゝ
本ゝ氏ゝ左ゝ門ゝ我藤寿丸ゝ合
世ゝ係ゝ左ゝの任ゝ氏ゝ

笠井奉馬殞命

笠井肥後ゝ甲州ゝ義士也伝玄勝頼二代ゝ仕ゝ武
功抜ゝ群ゝ勝頼憑敬恩ゝ伊豆ゝ登庸
功臣ゝ義士ゝ踏ゝ笠井ゝ長坂ゝ諂ゝ
勝頼之ゝ疎ゝ遠ゝ玄ゝ
笠井右良ゝ心ゝ抜群ゝ者ゝ伝玄ゝ
義ゝ忠ゝ勝ゝ為ゝ
危難ゝ俱ゝ氏ゝ節ゝ
既ゝ天正三年ゝ月勝頼
長坂ゝ

大神君信長ゝ敬

三刃長篠より勝頼乃軍
卒十余万人を
掬ひ三重より攻
両君各公達ひ携
へ要害より嶮なりの
地浅田乃城に拠
しまふのがしされど
撃戰数ヶ所して甲
刃の英雄数將戰場
に散ばり
一勝頼必死より迫
れり爰よりおのく敵軍
乃勇士四百余人討死

して勝頼死亡と見
生嶮崎ヶ山甲刃
より逃んとする時より
勝頼乃馬疲労て
敵に討れども
一足も進む時より弁
死投い勝頼より一町
許後く嶮より敵と
矢拂ひく落と
退きるる所
うく見危接命とかくも
敵に討く勝頼より等也
公立并死投守あそば君乃

沖の毒ゞ労れは抜よくまの〻勇ゆ忠ゆゞ馬よりれ
人名惇臣沖馬城場き紀ちんと戸に場頼信ろ注
敵幕ゝ多し汝我馬よ多べ忠討死をゞしとて下立
ゞ紀没を討功者為恩命者軽因義と云ふく場牧
城我るよ乗せ沖るの紀押載き寺を追幕ゝ
歓中よかけ入大勢城寄数ゝ敵城ゝ多の敵別場よ
討死ゝりるとをるよ場牧遣よ蒙迫ゝべ大忠初幕
多ど追寺紀来ゝ返ぬ城対蓋井傷牧竟よ死
亡城先るゞ多ゝゞを紀蓋井ゞ働城ん関ゝく徳川

徳田武田の三郎よ多のく鳥居忠蓋井と社勇士の鏡と
は多称ゝ乃遠寄よをる義後世よ伝へく侍

幸村遺嘱 一子二

高田幸村ち昌幸乃二男也を性質剛毅ゝして大勇
正操国士義の気多りて道ゝ孝ゝ忠ゝ
幸村武勇命せよ指揮ゝ軍旅ち係乃蘊奥よ通
百戦百勝乃名の〻ふあゝゞ射城ち孝よゆゞるく
後よ義よ死せり後よ武門乃亀鏡とをるゝ
あゝゞく死寞の道後詰む人を豈世人城敬

だりんや慶長五年上杉方石田三成ゞ暴乱の時
房州昌幸義為よりとこの城を面よ分ッ時きこ
多よ道伏ゝ人を村中遺戒城ゝ高れゞ敵手
よ関んぞ父乃高城継ゝ心とせるもゝ慶長十
九年豊臣秀頼之城乃ゝ将ゝ幸村大坂の味方ゝ
入ゝ赤村長門守板倉隠岐守ゝ酒井備前と
敵軍城高後もるよ主熟道ありと後して
大神君乃寛仁ゝ秀頼乃智恵と主ゝ英雄の必城
秀頼乃得られぞるゝ城ゝ次ゝ将熟能あるとして

東方よ伊井本多榊原池田等乃英傑あり西方よ
道大修理ゞ奸佞あり為真の勢ひなとへ石と卵
城碎くよ似ゝべられども幸村唯壮為ゝ城
義よ徹者ゝ死城義の必為よ変せり既ゝ
兩公住吉平野よ陣城ゝ真田隠岐守幸尹
昌幸ゝ子幸村ゝ叔父大神君ゝ御供衆ゝ幸村よ説せられゝ汝ゞ叔兄
皆東方よあるとゝ城ゝ惟汝大坂よ堂ゞ義
よ度り死よ逢ゝ行ゝ今迄よ東軍よ降参べ
信濃国ゝ一命よ一家下置之とゝ幸村幸尹よ

爲くやりたる史
志士に元と溝整
よ表とし志を
伐変じとそ
れ幸村不常なり
といへ共命伐義将
乃門よ受信濃源
氏の姓伐厚ふ
如何ぞ孫の重き
を紛失伐変じ
だりんや大坂よ仕
るうれ幸村父ば

者伐継ぎし古の伐高れを孫ぬ伐むさぶるう。あらば
商人乃徒ゆして置伐将乃道と偽だりんや伐ぬ偽義
ぬ立ものと　源太君乃芳命下ぬるとといへども忠孝義
乃板まる義ぬ撫ぐし。ぬ長ぬ哭るとぬ芳命ぬ対し
ぬりるべしとぬる之伐答び幸尹ぬるとぬ
太神君よ申伐公者ぐ感激しぬ。ぬ年文月二日奥州
乃大軍河内ぬ向ぬる。伊ぬと風ぬ幸村器甲ぬ千人
伐対ぬし摂州平野よ出陣伐一子大助秀頼の命と
ぬく人質郭伐ぬる。父よ伐ぬ時よ幸村大助乃

忠厚にして日汝が祖父房刀昌幸新羅源氏武
門の家系を奇狂しく武名天下に高く世に稀なる
義士死ざる者臣幸村も又年月遠次第佛門に
志し徒に過ぎて今必勝とて自ら死ぶべき決
れり士は死地に投ずるは義士たるもの為に
義戦戦場に曝しく義名を不朽に伝んとおのへ
我志徒に空く死地に入る秀頼書を送へ
び幸村が腕力を見るあるとは知るべしと疑なく
むべるべし汝早く城中に帰て秀頼を守護し世害

乃ち我は一時に腹切て我に泉下に会せよと書列
し大助城中に入へ
堅陣を衝破り雲霞の如く打し去日敵
を之を播州岡山表に於て越前乃大軍に敗し西尾
久作越前の仁右衛門と号に接し戦て首級授く完に絶世乃
義将なり